

中国語の再帰表現における他動性と客体化の関連性 — 「V + 身体部位 N」の形式を中心に—

日下部 直美

はじめに

本稿は、中国語における身体部位名詞を用いた再帰表現について考察するものである。中国語学における「再帰」に関する従来の研究では、単文や複文における所謂再帰代名詞“自己”の照応関係を生成文法の観点から分析したものが多い。これに対し、「動作主が動作主自身に対して行う行為」という現象に視点を置き、これを「再帰表現」として、その統語的制約について分析している研究は殆ど見られないのが現状である。

「再帰表現」としては、動作主が自分自身の身体部位に対して行う表現、「身体を洗う」等の全身に及ぶ表現、「気持ちを落ち着かせる」等の自分自身の心や精神状態に対して行う表現、または、衣服等の着脱を表わす動詞を用いた表現などが挙げられる。日本語における「再帰」に関する研究としては、主に高橋 1975、1985、仁田 1982 a、1982b、1988、工藤 1982、1995 等が挙げられるが、中国語においては、張威 1993 が日本語学の「再帰動詞」という枠組みを用い、中国語の一部の動詞を「再帰動詞」と提示しているのみである。¹⁾

本稿では、「再帰表現」のなかでも特に身体部位名詞を用いた「V + 身体部位 N」形式（V は動詞、N は名詞）を取り上げ、「再帰」という視点と関連した他動性の特徴に基づき、これらの他動性の高低を考察する。また、その他動性の高低が、賓語である身体部位 N の定語の位置にある“自己”との共起と関連しており、更には、話し手（“我”）が主語の場合と他者（“他（她）”）が主語の場合においても、両者の共起が関連していることを「視点」と「客体化」

の観点から分析を行う。

動作主については、聞き手を表す二人称代名詞“你”も、話し手である“我”から見て「他者」とであると判断するが、「他者」という存在としてとりわけ認識しやすい“他(她)”を主な考察の対象とする。また、身体部位 N の定語の位置に置かれるものとしては、“自己”のみを取り上げ、“我”、“他(她)”は分析の対象外とする。高橋 1975 は日本語の所属関係において、自分の所属物に対して行う働きかけを表わす場合は、他人の所属物に対して行う場合と異なり、その名詞に所属先としての持ち主を明示しないと指摘している。中国語も日本語と同様に、「V + 身体部位 N」の再帰表現において、賓語である身体部位 N の定語の位置に動作主と一致した所属先を示すことはない。²⁾ しかしながら、“自己”は前出の動作主と照応することができ、身体部位 N の定語として用いられる場合が多々見られることから、本稿では“自己”と身体部位 N との共起のみを扱う。また、人称代名詞と結びついた“我自己”、“他(她)自己”の形式も扱わない。³⁾

1. 再帰表現とその他動性の高低

中国語における再帰表現として、以下のようなものが挙げられる。

- (A) 眨眼(睛) [瞬きする]、点头 [頷く]、歪嘴(巴) [口をゆがめる]
招手 [手を振る、手招きする]、抱胳膊 [腕組みをする]
伸腿 [足を伸ばす]
- (B) 刷牙 [歯を磨く]、洗手 [手を洗う]、梳头发 [髪をすく]
- (C) 剪指甲 [爪を切る]、刮胡子 [髭を剃る]、拔牙 [歯を抜く]
切断手指 [指を切り落とす]

上の (A) ～ (C) 類は、いずれも動作主が自分自身の身体部位に対して行

う動作——所謂再帰的行為であり、目的語の位置にある身体部位 N は、動作主の一部である。これらの行為における他動性の高低を考察するために、本稿の視点と関連した他動性の性質として、Hopper and Thompson1980 及びヤコブセン 1988 から以下の特徴を取り上げ、焦点を当てる。

(i) 動作主の意志性 (VOLITIONALITY)

(ii) 対象物は変化を被る

(iii) 対象物の被影響度 (AFFECTEDNESS OF O)

((i)、(iii) は Hopper and Thompson1980、(ii) はヤコブセン 1988)

(i) の「動作主の意志」とは、「動作主が何らかの目的をもってその動作を行うかどうか」を表す。(ii) の「対象物は変化を被る」は、「対象物がどのような変化を伴い、どの程度の変化を被るか」を指す。(iii) の「対象物の被影響度」は、「対象物が行為の結果どの程度影響を受けたか (全面的に影響を受けたか、部分的に影響を受けたか、或いは全く受けていないか)」を表す。以上の特徴が多く備わっているものは他動性が高く、少ないものは他動性が低いものと判断する。

上の三種類の行為は全て動作主が自分自身の身体部位に対して行うものであるが、(A) 類の行為の「眨眼 (睛)」については、対象物である身体部位の変化及び身体部位の被影響度はないと考えられる。「点头」、「歪嘴 (巴)」、「招手」、「抱胳膊」、「伸腿」においては、身体部位の空間的位置の変化が生じているが、身体部位の被影響度は見られない。

(B)、(C) 類の行為は、いずれも身体部位の状態が変化するものである。この「状態変化」という特性は、動作主が身体部位に対して「整える」、「きれいにする」という目的で、「櫛」、「手」等の外的手段を用い、「櫛で梳く」、「手を洗う」といった働きかけを行った上で、当該の身体部位の形状または表面の状

態を変化させるということである。したがって、「状態変化」という特性は、「空間的位置の変化」より他動性が高いと判断できる。また、(B) 類の場合は、身体部位の表面及び形状の変化のみであるため、対象物である身体部位の被影響度は部分的であると考えられる。また、(C) 類については、身体部位が「分離」し、動作主である主体から切り離された別個のモノとして認識されるため、対象物である身体部位の被影響度は全体的であると見なすことができる。したがって、(B) 類と比べると、(C) 類の方が他動性が高いといえるため、(A) ～ (C) 類の他動性の高低は、(A) < (B) < (C) と示すことができる。⁴⁾

以下、(A) ～ (C) 類において、動作主が“我”及び“他(?)”である場合に身体部位 N の定語の位置に現れる“自己”との共起について具体例を挙げつつ見ていく。

2. 身体部位 N の定語の位置に現れる“自己”

2.1 (A) 類の再帰表現

まず、(A) 類の行為の場合を見てみよう。⁵⁾

(1-1) 灰尘吹进了我的眼里,我不由自主地把 {^{??} 自己的 / ϕ } 眼睛眨了眨, 然后, 继续望着远去的汽车。

(1-2) 灰尘吹进了她的眼里,她不由自主地把 {[?] 自己的 / ϕ } 眼睛眨了眨, 然后, 继续望着远去的汽车。

[目に埃が入ったので、{私 / 彼女} は思わず瞬きした。それから、遠くへ去ってしまった車を見つづけていた]

(2-1) 最后我让梓绮换了条短裙子端上托盘来回走了几圈, 终于把 {^{??} 自己的 / ϕ } 头点了下来。梓绮悄悄松了口气, ……

(2-2) 最后他让梓绮换了条短裙子端上托盘来回走了几圈, 终于把 {^{??} 自己的 / ϕ } 头点了下来。梓绮悄悄松了口气, ……

[最後に {私 / 彼} は梓綺にミニスカートに替えさせ、トレーを持たせて何周かぐるぐると歩かせて、やっと頷いた。梓綺は静かにほっと息をつき、…]

(3-1) (叔父を騙そうとして)

有一天我叔叔走过来以后，我马上把 {^{??} 自己的 / ϕ } 嘴巴一歪，叔叔问“你怎么了？”“中风了。”

(3-2) 有一天他叔叔走过来以后，他马上把 {[?] 自己的 / ϕ } 嘴巴一歪，叔叔问“你怎么了？”“中风了。”

[ある日{私/彼}の叔父がやってきたとき、彼はすぐに{自分の/ ϕ }口をゆがめた。叔父は「どうしたんだ？」と尋ね、({私/彼}は)「中風になった」(と答えた)]

上の (1-1) ~ (3-2) は、全て“自己”が賓語である身体部位 N の定語の位置にあっても文法的には問題がない。しかしながら、動作主が“我”、“他”いずれの場合も、“自己”があると不自然に感じられ、ゼロ形式 (ϕ) の方が自然である。(1-1)、(1-2)、(3-1)、(3-2) は、インフォーマントの個人差はあるものの、動作主が“我”より“他”の場合の方が、許容度が若干高くなっている。

次に同じく (A) 類の“招手”、“抱胳膊”、“伸腿”の例を挙げる。

(4-1) 他们一齐过来拜见：“都督！大都督！”我一声不响，对他们把 {^{??} 自己的 / ϕ } 手招了招，然后跨入中舱。

(4-2) 他们一齐过来拜见：“都督！大都督！”他一声不响，对他们把 {^{??} 自己的 / ϕ } 手招了招，然后跨入中舱。

[彼らは皆そろって「都督！大都督！」と謁見しに來た。{私/彼}は一言も言わず、彼らに対して手を振って、真中の船室へと跨い

で入っていった]

(5-1) 我放松了刚才那样紧绷的神经，转过身正对镜头把 {[?] 自己的 / ϕ }
胳膊抱在胸前，……

(5-2) 他放松了刚才那样紧绷的神经，转过身正对镜头把 {[?] 自己的 / ϕ }
胳膊抱在胸前，……

[{私 / 彼} は明らかにさっきの強張った神経を緩めて、身体の向きを変え、真っ直ぐにレンズに向かって胸の前で腕組みをし…]

(6-1) 我一会儿把 {^{??} 自己的 / ϕ } 腿伸出护栏，一会儿又缩回去，最后把它悬在空中。

(6-2) 他一会儿把 {[?] 自己的 / ϕ } 腿伸出护栏，一会儿又缩回去，最后把它悬在空中。

[{私 / 彼} はガードレールに {自分の / ϕ } 足を伸ばしたり引っ込めたりしていたが、最後に足を宙に浮かせた]

上の例文も同様に、動作主が“我”、“他”いずれの場合も、“自己”があると不自然に感じられ、ゼロ形式の方が自然である。(6-1)、(6-2)についても、“他”の場合は、やや不自然ではあるものの、“我”の場合と比較すると許容度が高い。

2.2 (B) 類の再帰表現

次に (B) 類の行為について見てみる。

(7-1) 我吃完饭，把 {[?] 自己的 / ϕ } 牙刷干净，然后去约会了。

(7-2) 他吃完饭，把 {[?] 自己的 / ϕ } 牙刷干净，然后去约会了。

[{私 / 彼} は食事を終えると、{自分の / ϕ } 歯をきれいに磨いてからデートに出かけた]

(8-1) 刚才我为猫儿调理食物，所以我先去洗手间把{自己的 / ϕ } 手洗干净，然后去做饭。

(8-2) 刚才她为猫儿调理食物，所以她先去洗手间把{自己的 / ϕ } 手洗干净，然后去做饭。

[さっき {私 / 彼女} は猫ちゃんの餌を作っていて、手が汚れてしまった。そこで洗面所へ行って {自分の / ϕ } 手をきれいに洗った]

(9-1) 我见欧阳萸皱皱眉，马上意识到自己皮泡眼肿，蓬头散发，一定面目可憎，赶紧抓起梳子把{自己的 / ϕ } 头发梳好。

(9-2) 她见欧阳萸皱皱眉，马上意识到自己皮泡眼肿，蓬头散发，一定面目可憎，赶紧抓起梳子把{自己的 / ϕ } 头发梳好。

[{私 / 彼女} は欧陽萸が眉をしかめているのを見て、すぐに自分が目を腫らし、髪をぼうぼうに乱し、きつと憎たらしい顔つきをしていたのだらうということに気づき、大急ぎで櫛をつかんで {自分の / ϕ } 髪をきれいに整えた]

(7-1)、(7-2) は、動作主が“我”、“他”のいずれの場合であってもやや不自然であるが、(8-1) ～ (9-2) は、“自己”が賓語である身体部位 N の定語の位置にあっても問題はなく、両者ともに自然である。この差異については、後の 4.2 で言及する。

2.3 (C) 類の再帰表現

最後に、(C) 類の行為を見てみる。

(10-1) 我用了一个刀片，花了两个小时的时间，把{[?]自己的 / ϕ } 指甲剪短，把图案刮干净，……

(10-2) 她用了一个刀片，花了两个小时的时间，把{自己的 / ϕ } 指甲剪

短，把图案刮干净，……

[{私 / 彼女} は刃物で二時間かけて {自分の / ϕ } 爪を短く切り、デザインをきれいに擦り落とし…]

(11-1) 比赛的当天一早起来我就把 { [?] 自己的 / ϕ } 胡子刮了。因为我们有个习惯，比赛当天不刮胡子，怕运气不好。

(11-2) 比赛的当天一早起来他就把 { 自己的 / ϕ } 胡子刮了。因为他们有个习惯，比赛当天不刮胡子，怕运气不好。

[試合の当日に {私 / 彼} は早く起きた。起きるとすぐに {自分の / ϕ } 髭を剃った。彼らには習慣があり、試合の当日に髭を剃らないと、運が悪くなるのを気にするからだ]

(12-1) 我上回牙痛时，就是自己动手把 { 自己的 / ϕ } 牙拔掉的，所以这回也一样。

(12-2) 他上回牙痛时，就是自己动手把 { 自己的 / ϕ } 牙拔掉的，所以这回也一样。

[{私 / 彼} はこの前、歯が痛かったとき、自分で {自分の / ϕ } 歯を抜いた。だから今回も同じだ]

(13-1) 听到小泉参拜靖国神社的消息后，我非常气愤用刀把 { 自己的 / ϕ } 小指头剃下，装在信封里寄往了日本驻韩国大使馆，表示抗议。

(13-2) 听到小泉参拜靖国神社的消息后，他非常气愤用刀把 { 自己的 / ϕ } 小指头剃下，装在信封里寄往了日本驻韩国大使馆，表示抗议。

[小泉氏が靖国神社を参拝したという知らせを聞いた後、{私 / 彼} は刃物で {自分の / ϕ } 小指を切り落とし、封筒に入れて韓国の日本大使館に送りつけ、抗議の気持ちを示した]

(10-1) はやや不自然であるが、(10-2) は自然である。(11-1) は個人差はあるものの、自然であると判断するインフォーマントもいるが、(11-2) は自

然である。(12-1)～(13-2)は、動作主が“我”の場合であっても“他”の場合であっても問題なく成立する。

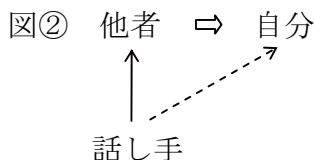
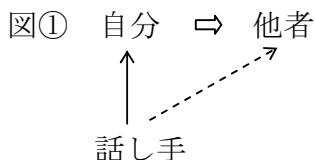
上に挙げた(1-1)～(13-2)の例は、全て動作主が自分の身体部位に対して行う行為であるが、他動性が低い(A)類では、身体部位Nと“自己”との共起はほぼ不自然であるにも関わらず、(B)類ではやや不自然、または、完全に問題なく成立する場合もある。更に、他動性が最も高い(C)類においても、“我”の場合より“他”の場合のほうが自然なものもあり、両者のいずれの場合においても問題なく共起できるものもある。

次章では、日本語における「自分」の視点的用法を挙げ、それを中国語に援用できるかどうか検討し、行為の他動性の高低によって何故このような現象が生じるのかについて分析を試みる。

3. 日本語の視点的用法の「自分」

廣瀬 1997:54 は、日本語における視点的用法の「自分」の客体的自己⁶⁾が関わる際に、話し手が人を見る視点、即ち自分及び他者を見る視点について以下のように指摘している。話し手が自分をどのように見るかという点については、「話し手は、他者を見るがごとく、自分を見ることができる。この場合、話し手は、自分が他者を見る視点から、自分を見ていることになり、したがって、見られている「自分」は他者に近づくことになる」(下の図①)と述べている。一方、話し手が他者を見る視点については、「話し手は客体的自己を他者に投影し、他者を自己化する」(下の図②)と説明している(廣瀬 1997:55)。

客体的自己を表す「自分」を図示すると以下ようになる。



(図①、②は廣瀬 1997:54-55 からの引用。番号は引用者による。実線の矢印は見る行為を、破線の矢印は視点を表し、二重線の矢印で「甲⇒乙」とある場合、甲が乙に「心理的に近づく」ことを示す)

図①の実例を以下に挙げる。

① ぼくは、学生時代、自分の車に乗っていた。

(廣瀬 1997:56 からの引用。体裁は引用者による)

上の例文①のように、「自分の車」と表現する場合は、現時点における文の発話者としての話し手がその当時の話し手に客体的自己を投影した上で、その観点から『自分の車』と言っている場合である。

一方、図②では、話し手は、自分の分身を他者に写し出し、他者を「自分」に近づけることによって『自分の車』と言っている場合であり、状況の主体が他者（本稿では“他(她)”）のときである。当該例を以下に挙げる。

② 山田は、学生時代、自分の車に乗っていた。

(廣瀬 1997:57 からの引用。体裁は引用者による)

例文②では、話し手が当時の山田に「自分」を近づけ、客体的自己を投影しているため、山田が当時乗っていた車は、話し手にとって『自分の車』であるかのように写っている。

また、図①と図②の視点的用法における観察者としての「自分」について、廣瀬 1997:65 は以下のように規定している。

自己の他者化の原則（図①の場合）

話し手は自分自身を客体化するとき、その客体的自己を自分が観察可能なところまで遠ざけなければならない。

他者の自己化の原則（図②の場合）

話し手は他者に自分の客体的自己を投影するとき、その他者を自分が観察可能なところまで近づけなければならない。

本稿で扱う身体部位については、廣瀬 1997:77 は Lakoff 1992⁷⁾ を挙げ、「主体的存在としての人は、知覚・意志・判断などの意識主体」であり、一方、客体的側面としては客観的に捉えられる身体やその部分、性格や社会的地位、過去における発言や行いなどであるとしている。

上で述べたように、「自己の他者化」及び「他者の自己化」が行われ、観察者である話し手が身体部位に対して観察可能な状態になっているということは、身体部位の状態の変化及びその被影響度を認識することができると思われる。よって、身体部位の状態変化を伴い、その被影響度が高い場合、即ち他動性が高い行為の場合は、「自己の他者化」及び「他者の自己化」が行われやすいと考えられる。

所謂再帰代名詞の視点表現的特徴については、久野 1978 が指摘しているように日本語に限られたことではなく、様々な言語で同様の特徴を挙げることが可能であり、ある一定の普遍性を見出すことができる。本稿でも久野 1978 の指摘に基づき、上に挙げた日本語における客体的自己を表す「自分」の視点的用法が、中国語における“自己”の用法へと応用できるかどうか分析を試みる。即ち、中国語の再帰表現において他動性が高い行為の場合は、「自己の他者化」及び「他者の自己化」が行われやすくなり、観察者である話し手がその身体部位を客体化して捉えやすくなるため、賓語である身体部位 N を“自己”で修

飾することができる」と推測する。また、状況の主体が話し手自身であるよりも、他者（即ち第三者）である方が、話し手が状況の主体をより客体的に捉えやすいため、賓語である身体部位 N を修飾する“自己”と共起しやすくなると考えられる。次章では上に挙げた（A）～（C）類の（1-1）～（13-2）までの例文を用いて考察を行う。

4. 中国語における“自己”と身体部位 N

4.1 （A）類の場合

例文（1-1）～（3-2）で挙げた再帰的行為である“眨眼（睛）”、“点头”、“歪嘴（巴）”において、“眨眼”以外の行為は全て意志的なものであり、いずれも身体部位の空間的位置の変化を伴うものである。⁸⁾ しかしながら、身体部位の被影響度が無いため、観察者である話し手にとっては身体部位の状態変化に対して観察不可能であると思われる。このため、状況の主体が“我”の場合の「自己の他者化」及び状況の主体が“他”の場合の「他者の自己化」を行うことができないため、身体部位を客体化して捉えることができないと見なすことができる。したがって、この場合は“自己”で修飾すると不自然に捉えられるのだと思われる。

（4-1）～（6-2）の“招手”、“抱胳膊”、“伸腿”も、上の場合と同様に、身体部位の空間的位置が変化しているが、身体部位の被影響度が無いため、観察不可能な場合であると見なすことができる。したがって、「自己の他者化」、「他者の自己化」を行うことができず、身体部位を客体化して捉えることができないのだと推測できる。したがって、この場合も身体部位 N の前に“自己”を用いると不自然になってしまう。

（1-1）、（1-2）と（3-1）、（3-2）及び（6-1）、（6-2）においては、主語が“我”の場合は、身体部位 N を“自己”で修飾するとかなり不自然であるが、“他”の場合は、やや不自然ではあるものの、“我”の場合と比較すると許容度が高い。

これは、自らの身体部位というものは、話し手や状況にとって自分自身と密接した極めて近い存在であるため、遠ざけることが困難である。よって、自らの身体部位を遠ざける「自己の他者化」よりも、近づける「他者の自己化」の方が行われやすいためであると考えられる。廣瀬 1997:65 では、「自己の他者化」と「他者の自己化」は鏡像的な関係にあるとしている。しかしながら、本稿の分析に基づくと、「自分」の指示対象が話し手である「私」と話し手から見た「他者」とでは、客体化を行う容易度に差が見られることが分かる。即ち、状況の主体が「私」であるより、「他者」である方が、対象である身体部位を客体化した存在として捉えやすいことが分かる。

4.2 (B) 類の場合

(7-1)～(9-2)の場合は、身体部位の表面及び形状の状態が変化しているため、身体部位の被影響度が部分的であることから、対象である身体部位に対して観察可能な状態であると判断できる。したがって、観察者である話し手は「自己の他者化」及び「他者の自己化」を行うことができ、身体部位を客体化して捉えることができる。これにより、(8-1)～(9-2)においては、状況の主体が“我”であっても“他”であっても、身体部位Nを“自己”で修飾しても問題はない。

しかしながら、(7-1)、(7-2)においては、どちらもやや不自然と判断される。この「歯を磨く」という行為については、董秀芳 2003:31 は以下のように指摘している。“刷牙”のようなコトガラは、他人の歯ではなく、自分の歯を磨くという我々の生活上での常識に基づいている。したがって、主語と賓語における領属関係は動詞と賓語の意味によって決定するため、この場合は、賓語に主語と一致した領属先をマークする必要は無いという。即ち、自分の身体部位を客体化して捉えることができる状態であるにも関わらず、「歯を磨く」という行為においては、生活上での常識として「自分の歯」であると想定されるため、“自己”でマークする必要がなく、あると不自然に感じられるのだと思われる。

4.3 (C) 類の場合

(C) 類の行為は、身体部位が動作主である主体から分離し、別個のモノとになってしまうということから、身体部位の被影響度が全体的である。したがって、(B) 類の (8-1) ～ (9-2) と同様に、「自己の他者化」及び「他者の自己化」が行われ、観察者である話し手が、身体部位に対して観察可能な状態になっているといえる。よって、この場合も、状況の主体が“我”、“他”のいずれの場合においても、賓語の位置にある身体部位 N と“自己”は問題なく共起することができる。

(10-1)、(11-1) がやや不自然と感じられるのは、A 類の (1-1)、(1-2) と (3-1)、(3-2) 及び (6-1)、(6-2) と同様に、観察者である話し手が状況の主体となっている場合は、自分の身体部位を客体化して捉えにくいためであると思われる。

5. おわりに

以上の考察により、本稿では、「V + 身体部位 N」形式の再帰表現における他動性の高低が、身体部位に対する客体化と関連しており、他動性が高い行為であるほど、「自己の他者化」及び「他者の自己化」が行われやすくなることを示した。これにより、観察者である話し手が身体部位を客体化して捉えやすくなるため、賓語の位置にある身体部位 N とそれを修飾する“自己”との共起が可能になることを述べた。また、話し手が「自分」を見る場合、即ち動作主が“我”の場合と比べると、他者を見る場合、即ち動作主が“他(她)”である方が、より“自己”と共起しやすくなることを明らかにした。これは、話し手の視点から他者を見ているということは、既に他者を自分とは異なる対象として客体化して捉えているためだと考えられる。

しかしながら、本稿で挙げたのはごく一部の事例であるため、今後はより多くの言語事実に即した更なる分析が必要であると思われる。これは今後の課題としたい。

注

- 1) 平井・成戸 1994 は、“穿（着る、履く）”、“戴（かぶる）”、“披（はおる）”等の所謂“身につけ動詞”とトコロを表わす成分との共起について考察を行っているが、本稿で扱う「再帰」という観点に基づいた分析はなされていない。
- 2) 主語が三人称の場合に身体部位 N の定語として“他（她）”を用いると第三者の身体部位を指示する場合がある。このことについては沢田 1976、1978 も指摘している。

“讲得好，讲得很好呀。”学生拍拍他的肩膀笑着说。

（「上手い、話が上手だ」と学生は彼の肩を叩いて笑いながら言った）

（例文は沢田 1976:125、1978:30 からの引用）

上の例文の“他”は“学生”を指示していない。沢田 1978:30 は、身体部分を表す名詞と感情や情緒を表す語が用いられている場合について、「その修飾語には“自己”を用い、“他”を用いない。“他”を用いると指示対象が異なってしまうのである」と述べている。本稿も、沢田 1976、1978 と同じ立場をとり、“他（她）が身体部位 N の定語の位置にくる場合は分析の対象に含めないこととする。
- 3) 程工 1994 によると、“人称代名詞＋自己”形式における“自己”は再帰代名詞の場合もあり、または、人称代名詞に強調の機能をもつ“自己”を加えた場合もあるという。前者の場合は照応語であり、必ず主語を指している。後者の場合は純粋な代名詞であり、制約を受けず、特定のコンテキストにおいて、照応の解釈以外に非照応の解釈ができる場合もある。即ち、“人称代名詞＋自己”が第三者を指示する場合も存在するため、本稿では考察の対象としない。詳しくは程工 1994 を参照のこと。
- 4) (A) ～ (C) 類の行為における他動性の高低の詳細な分析については、日下部 2008 を参照のこと。
- 5) 本稿で挙げる例文は、作例及びインターネットから引用したものを一部変更したものであり、いずれもインフォーマントチェックを受けている。以下の (1-1) ～ (13-2) における文法性判断は、やや不自然なものを「?」、かなり不自然なものを「??」で示した。「φ」はその位置に修飾語が置かれず、ノーマークであることを指す。

- ⁶⁾ 廣瀬 1997:49 によると、「客体的自己」とは、「他者と同じ側におかれるという意味で客体化された『自分』」であるとしている。
- ⁷⁾ Lakoff, George. 1992 Multiple selves: The metaphorical models of the self inherent in our conceptual system. Paper presented at the Mellon Colloquium on the Self, Emory University. (ただし筆者は原文は未見)
- ⁸⁾ “点头”、“歪嘴(巴)”の空間的位置の変化については、日下部 2008 を参照のこと。

主要参考文献

- 相原茂 1985 「“亲嘴”の“嘴”は誰のもの？」『明治大学教養論集』176号
- ウェスリー・M・ヤコブセン 1988 「他動性とプロトタイプ論」久野暲・柴谷方良(編)『日本語学の新展開』くろしお出版
- 日下部直美 2008 「現代中国語における再帰表現に関する一考察——「V + 身体部位 N」の形式を中心に」『多元文化』8号
- 工藤真由美 1982 「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』13:4
- 工藤真由美 1995 『アспект・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現』ひつじ書房
- 久野暲 1978 『談話の文法』大修館書店
- 呼美蘭 2002 「再帰表現“自己”について」『中国語学』249号 日本中国語学会
- 沢田啓二 1976 「中国語の代名詞に関するいくつかの問題」『天理大学学報』101号
- 沢田啓二 1978 「“他”と“自己”」『天理大学学報』111号
- 澤田治美 1993 『視点と主観性—日英語助動詞の分析』ひつじ書房
- 高橋太郎 1975 「文中にあらわれる所属関係の種々相」『国語学』103号
- 高橋太郎 1985 「現代日本語のヴォイスについて」『日本語学』4:4
- 張威 1993 「中国語再帰動詞及びその特殊用法——“给～+再帰動詞”をめぐって」『中京大学教養論叢』34巻 第2号

- 仁田義雄 1982a 「再帰動詞，再帰用法 —— Lexico-Syntax の姿勢から」『日本語教育』47号 日本語教育学会
- 仁田義雄 1982b 「動詞の意味と構文——テンス・アスペクトをめぐる」『日本語学』1:1 明治書院
- 仁田義雄 1988 「拡大語彙論的統語論」久野暉・柴谷方良(編)『日本語学の新展開』くろしお出版
- 平井勝利・成戸浩嗣 1994 「“身につけ動詞”とトコロをめぐる表現の考察」『言語文化論集』第XVI巻 第1号 名古屋大学言語文化部
- 廣瀬幸生 1997 「人を表すことばと照応」『指示と照応と否定』研究社出版
- 守屋宏則 1980 「中国語の再帰代名詞化の条件」『東京外国語大学八十周年記念論文集』東京外国語大学八十周年記念論文集編集委員会編 東京外国語大学
- 守屋宏則 1987 「“自己”の構文法的・非構文法的特徴」『東洋大学紀要』教養課程篇 26号
- 李臨定 1993 『中国語文法概論』宮田一郎訳 光生館
- 程工 1994 〈生成语法对汉语“自己”一词的研究〉《国外语言学》第1期
- 董秀芳 2003 〈定语位置上的指代词、反身代词和零形式〉《语法研究和探索》十二 商务印书馆
- 王惠 1997 〈从及物性系统看现代汉语的句式〉《语言学论丛》第十九辑 商务印书馆
- 袁毓林 1994 〈一价名词的认知研究〉《中国语文》第4期
- 张伯江 2000 〈论“把”字句的句式语义〉《语言研究》第1期
- 周晓康 2000 〈人体名称的实体地位及其在及物性系统中的语义功能〉《面临新世纪挑战的现代汉语语法研究》山东教育出版社
- Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson 1980 Transitivity in Grammar and Discourse, *Language*, 56:251-299.

- Lakoff, George. 1992 Multiple selves: The metaphorical models of the self inherent in our conceptual system. Paper presented at the Mellon Colloquium on the Self, Emory University.
- Tang, C.-C. Jane 1989 Chinese Reflexives, *Natural Language and Linguistic Theory*, 7:1:93-121.